

Title	法学研究第四十八巻総目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.12 (1975. 12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19751215-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法学研究 第四十八卷 (昭和五十二年) 総目次

論 説

号数 頁

通頁

執筆 者

刑事裁判の確定力……………一

レイモン・アロン小論……………一
——ひとりの反イデオロギー的イデオログ——

ザルツヴエーデルの公法契約論……………一
表見代理についての一考察……………二

信用保険と保証保険……………二
E・パークとドイツ・ローマン主義の政治思想……………三

民族解放戦争としての朝鮮戦争……………三
——革命認識の三類型——

西ドイツの裁判官研究について……………三
——西ドイツ法社会学の現状に関する一つのメモ——

国際海峡の通航制度(一)……………四
——第三次海洋法会議の第二会期(カラカス)における諸提案と問題点をめぐって——

現代の政治過程とコミュニケーション……………四
——第三次海洋法会議の第二会期(カラカス)における諸提案と問題点をめぐって——

国際海峡の通航制度(二)……………四
——第三次海洋法会議の第二会期(カラカス)における諸提案と問題点をめぐって——

日本陸軍の在郷の基盤……………五
——地域の尚武組織の成立と発展——

毛沢東の戦略と孫子の兵法……………五

……………六

一

青柳文雄
奈良和重
藤原淳一郎
林脇トシ子
倉沢康一郎
多田真鋤
小此木政夫
宮沢浩一
栗林忠男
生田正輝
栗林忠男
靈山德行
中村菊男

英国の懲治場 (House of Correction) についで (一).....	六	二六	五六〇	坂田仁
ソ連共産党、その構成員の民族的組成.....	七	一	六七三	中沢精次郎
——シューマン・プランをめぐる英国の政治過程(一).....	七	三二	七〇四	田中俊郎
——英仏交渉を中心にして.....	七	五一	七二三	坂田仁
英国の懲治場 (House of Correction) についで (二・完).....	七	五一	八〇五	青柳文雄
供述証拠に関するイギリス法とアメリカ法.....	八	一	八二〇	田中俊郎
——シューマン・プランをめぐる英国の政治過程 (二・完).....	八	一六	八五〇	曾根泰教
——英仏交渉を中心にして.....	八	四六	八五〇	曾根泰教
政治学における科学革命の構造 (一).....	八	四六	八五〇	曾根泰教
——政治認識の諸様相.....	八	四六	八五〇	曾根泰教
代理制度と効果転帰.....	九	一	八九五	林脇トシ子
マルシリウス・パドヴァの実定法理念.....	九	三一	九五五	鷲見誠一
政治学における科学革命の構造 (二・完).....	九	六〇	九五四	曾根泰教
——政治認識の諸様相.....	九	六〇	九五四	曾根泰教
——被害者認識の仮構と現実.....	九	一〇	一〇一五	内池慶四郎
継続的不法行為による損害賠償請求権の時効起算点 (一).....	一〇	一	一〇一五	内池慶四郎
——被害者認識の仮構と現実.....	一〇	一	一〇一五	内池慶四郎
ソ連共産党、そのエリートの所属民族.....	一〇	二九	一〇四三	中沢精次郎
石橋湛山の戦後構想.....	一〇	六三	一〇七七	増田弘
——アメリカの対日戦後構想との相剋.....	一〇	六三	一〇七七	増田弘
社会変動と経済協力.....	一一	一	一一三五	十時敵周
——発展途上国の工業化と社会変動.....	一一	一	一一三五	十時敵周
継続的不法行為による損害賠償請求権の時効起算点 (二・完).....	一一	三一	一一六五	内池慶四郎
——被害者認識の仮構と現実.....	一一	三一	一一六五	内池慶四郎
額面株式の額面最低限の法定について.....	一二	一	一二三五	米津昭子
独占禁止法制における市場支配的企業の規制.....	一二	一一	一二四五	金子晃
ウィーン学団における科学と政治.....	一二	三五	一二七一	小野修三

資料

律令考二題……………一
 自由党高田事件に関する新史料……………五
 西ドイツ刑法学の現状（追録Ⅲ）……………六
 第六回パン・アフリカ会議の概要とニエレレ大統領の開会演説……………七

研究ノート

改定律令編纂者考……………二
 山本謙三訳・英人參駝兒斯註「需斯知尼安帝法典」(全二十冊)をめぐつて……………三
 司法省御雇外人ジュール・ジュスラン……………四
 西ドイツにおける行政契約論……………一
 — W・ボーゼ「公行政の行為形式としての從屬的行政契約」を中心として —……………一
 藤田弘道……………一五九
 森征一……………二五一
 池田真朗……………三六六
 藤原淳一郎……………一九一

判例研究

〔商法〕 一四一 機関方式による手形偽造に民法一一〇条の類推適用が認められた事例……………一
 近藤龍司……………八〇
 〔最高裁判事例研究〕 一一三……………一
 石川耕太……………八五
 松田信雄……………八五
 〔最高裁判事例研究〕 八六……………一
 富田信穂……………九〇
 青柳文雄……………九〇
 安井威興……………一六九
 〔商法〕 一四二 法人格否認の法理と新旧両会社の同一性……………二
 松岡浩……………六七
 〔労働法・経済法〕 一〇四 現業国家公務員に対する不利益処分を裁判上争う方法……………二
 青柳文雄……………七三
 松岡浩……………一七五
 〔最高裁判事例研究〕 八七……………二
 青柳文雄……………七九
 藤隆……………一八一
 〔商法〕 一四三 株主に新株割当通知が到達しなかつた場合と会社の賠償責任……………三
 高鳥正夫……………五九
 三……………二六五

〔最高裁判事例研究〕	一二四	三	六三	二六九	伊東之助
〔最高裁判事例研究〕	八八	三	六九	二七五	岩瀬森助
〔商法〕 一四四 取立委任文句および被裏書人の氏名の抹消と手形裏書の連続		四	九〇	三八六	青柳正文
〔最高裁判事例研究〕	一二五	四	九四	三九〇	大野幸夫
〔最高裁判事例研究〕	八九	四	一〇一	三九七	酒井正史
〔商法〕 一四五 実質的には個人企業である株式会社の営業譲渡		五	九四	五〇八	倉沢康一郎
〔最高裁判事例研究〕	一二六	五	九九	五二三	青柳文雄
〔最高裁判事例研究〕	九〇	五	一〇二	五一六	田中秀明
〔商法〕 一四六 会社の代表取締役が退職して同業の新会社を設立し、その代表取締役となり従前と同一の得意先と取引した場合、取締役の義務に違反するか		六	一〇八	六四二	河口清範
〔最高裁判事例研究〕	一二七	六	一一六	六五〇	米津昭子
〔最高裁判事例研究〕	九一	六	一一一	六五五	西岡清一郎
〔商法〕 一四七 取締役が辞任した場合と会社の退任登記をなすべき義務		七	一一四	七八六	青柳文雄
〔最高裁判事例研究〕	一二八	七	一一九	七九一	須藤三枝子
〔最高裁判事例研究〕	九二	七	一二三	七九五	宮島司
〔商法〕 一四八 交換手形の抗弁		八	六八	八七二	白井久明
〔最高裁判事例研究〕	九三	八	七三	八七七	青柳文雄
〔商法〕 一四九 認諾調書を有する株主に対する名義書換不当懈怠および総会決議の瑕疵の治癒		九	八〇	九七四	安柳富潔

〔労働法・経済法〕 一〇五 郵便局職員の政治的行為と刑事罰	九	八四	九七八	松岡浩
〔商法〕 一五〇 喪失した白地約束手形の除権判決と手形の再発行	一〇	九八	一一二	近藤龍司
〔最高裁民訴事例研究〕 一二九	一〇	一〇四	一一一八	宗田親晶
〔商法〕 一五一 第三者異議の訴と法人格否認法理の適用	一一	八〇	一一一四	安井威興
〔商法〕 一五二 合併承認決議における相手会社、営業譲渡決議における相手会社株主と特別利害関係	一二	六五	一三〇一	高鳥正夫
〔商法〕 一五三 表見代表取締役の手形署名代理	一二	七一	一三〇七	倉沢康一郎
〔労働法・経済法〕 一〇六 多数ビラの貼付と損害賠償の請求	一二	七四	一三一〇	阿久沢亀夫
〔最高裁民訴事例研究〕 一三〇	一二	八〇	一三一六	伊東彦

紹介と批評

矢部貞治著 『矢部貞治日記 銀杏の巻』	一	九五	九五	中村勝範
スヴェトザル・ストヤノヴィッチ著 『理想と現実の間——社会主義批判とその未来像』	二	九七	一九九	奈良和重
スタンレイ・S・サリー著 『税制改革への小径——租税支出の概念』	三	八一	二八七	木村弘之亮
徳永恂著 『ユートピアの論理——フランクフルト学派研究序説』	四	一〇六	四〇二	市川太一
伊東乾編著 『原典による法学の歩み』	五	一一一	五二五	原秀男
李昊宰著 『韓国外交政策の理想と現実（一九四五—一九五三）——李承晩外交と美国——』	六	一三二	六六六	小此木正夫
木内信藏編 『新版 政治地理学』	七	一二七	七九九	中村菊男
ロジャー・モーガン著 『一九四五年以後の西ヨーロッパ政治——ヨーロッパ共同体の形成』	八	八四	八八八	田中俊郎
安丸良夫著 『日本の近代化と民衆思想』	九	九三	九八七	内山秀夫
ジョン・モラル著 『柴田平三郎訳 『中世の政治思想』』	一〇	一〇九	一一二三	鷺見誠一
大賀祥充著 『株式会社設立の法理』	一〇	一一三	一一二七	吉永榮助
倉沢康一郎著 『保険契約の法理』	一一	八六	一二二〇	田辺康平

特別記事

奈良和重氏学位論文審査報告	四	一一四	四一〇
徳田教之氏学位請求論文審査要旨	五	一一四	五二八
故 西本辰之助先生追悼記事	九	一〇一	九九五
松本三郎氏学位請求論文審査要旨	一一	九一	一二二五